多文化理解と平和教育の実践・シンガポール日本人学校５年生授業報告

前シンガポール日本人学校小学部クレメンティ校　教諭
広島大学附属中・高等学校　教諭　瀬戸口　茂　久

キーワード　異文化理解、国際理解教育、多文化・多民族共生

赴任校の概要
シンガポール日本人学校小学部クレメンティ校
The Japanese School Singapore
URL：https://www.sjs.edu.sg/clementi/

1 はじめに

2022年４月から３年間、シンガポール日本人学校（クレメンティ校）に勤務する中で、探求学習の一環として平和学習に取り組む機会を得た。クレメンティ校では、児童が日常生活の中でシンガポールの文化や歴史に触れることで、多文化理解や平和意識を育むことを重視している。本研究では、５年生を対象とした授業実践を中心に、授業の展開、児童の学び、教育的意義について報告する。

初年度（６年生）では「私たちがつくる希望の道」というテーマで平和の意味について考えを深めた。シンガポールが第二次世界大戦中に日本の占領支配で苦しめられたにもかかわらず、現在日本に友好的である理由を問いとして、児童と共に平和の意味や実現の方法を考えた。その過程で、児童はリー・クアンユーの「日本の行った行為を完全に許し、また忘れることはできない。しかし、（日本からの）謝罪を受け入れることで憎悪を和らげることはできる。我々は過去にとらわれることなく、未来に向かって歩まねばならない」という言葉に触れ、考えを深めた。

筆者は、この言葉に至る背景について疑問を持ち、翌年度に個人的調査を行った。その中で、「シンガポールは多民族・多宗教国家であるにもかかわらず、どのように安定した社会を築いているのか」という問いが浮かび上がった。最終年度には、この問いを５年生の授業実践として児童と共に探究する活動を実施した。本稿では、その授業実践を中心に報告する。

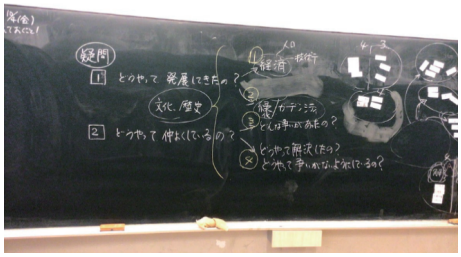
2 授業実践の概要・展開

本実践は、５年生の探求学習の時間を中心に行った。テーマは「シンガポールのすごいところ」であり、「なぜ多民族・多宗教国家であるにもかかわらず安定した社会を築けているのか」を探ることを大きな柱とした。授業の流れは以下の通りである。

(1) 導入：ナショナルデーの写真を見て気づいたことを共有する

授業のはじめに、ナショナルデーを紹介するポスターのような写真を提示した。写真にはマーライオンや大きな建物の後ろで花火があがり、さまざまな人々が一緒に走っている姿が写っていた。児童は「夜景がきれい」「いろんな民族の人がいる」「みんな前を向いて走っている」など、それぞれ感じたことを自由に発言した。

(2) 問いの設定：なぜ民族や宗教が違っても仲良くできるのか



写真について意見を出したあと、教師が「もっと知りたいことはあるか」と問いかけると、児童から「どうしてシンガポールの人たちは仲良くできるのか」「シンガポールはどうやって発展したのか」という意見が出た。話し合いの結果、児童は2つのチームに分かれてそれぞれのテーマを調べることになった。「ぼくは歴史を調べたい」「私は街の発展について調べたい」など、自分の興味をもとに主体的に関わろうとする様子が見られた。

授業では、2つの疑問を中心に黒板に整理した（右の写真参照）。黒板には「どうやって発展してきたのか」「どうやって仲良くしているのか」といった質問を書き、さらに「経済の発展」「ガーデンシティ構想」「過去の争いとその解決方法」といった考える視点も付け加えた。児童はこの板書を参考に、自分の疑問と学習内容を結びつけながら調べたり話し合ったりした。

本実践は当初「シンガポールは争いをどう乗り越えたか」を想定していたが、より広がりのある「シンガポールのすごいところ」というテーマに展開した。結果的に、争いに焦点を当てすぎることなく、調和や発展という前向きな学びへとつながったと考えられる。

(3) 調べ学習と整理

児童はグループごとに歴史や社会制度について資料を調べた。調査対象は、ラッフルズ統治時代、第二次世界大戦前後、独立後の社会政策（民族政策・緑化政策・住宅政策など）であった。調べた内容をスライドにまとめ、発表の準備を行った。

(4) 発表と交流

児童はグループごとに調べたことを発表した。「HDB（集合住宅）の中で民族ごとの住む割合が決まっており、「自然に交流できている」「昔はイギリスや日本に支配されていたが、その後自分たちの国を作って発展してきた」といった児童なりの言葉でまとめられた。また、各民族が大切にしている日を国の祝日としてお祝いしていることに気づき「いろんな文化をみんなで大事にしている」と理解する様子もあった。

教師が「他宗教の地域では争いが多いが、シンガポールでは起こっていない。なぜだろう」と問いかけると、児童は自然に疑問を持った。校外学習 “Harmony in Diversity Gallery” では、Telok Ayer Streetでの街歩きツアーやギャラリー内展示を通して、Inter-Religious Organization（IRO：10の異なる宗教団体により、シンガポールを平和な国にするために設立された共同機関）について、ホーカーセンターでは中華系、インド系、マレー系などが計画的に配置されていることを学んだ。

さらに「せっかくだから誰かに伝えたい」という声が上がり、学習計画の一部として予定されていた愛媛県今治市の常盤小学校との交流活動も行った。交流では「シンガポールは多民族でも仲良くできるところがすごい」と紹介し、一方で「今治は造船やタオル産業で有名で、地域の人が協力しているところがすごい」と日本側から紹介があった。お互いに自分たちの地域や国の良さを比べながら学び合うことで、児童の誇りや理解がさらに深まった。

3 児童の学びと教育的意義

授業を通して、児童は「平和」を単に争いがない状態として理解するのではなく、互いに幸せになるための努力の結果であることを学んだ。校外学習では、Telok Ayer Streetで異なる宗教が共存している様子を見て、違いを知り、理解し、尊重することが平和につながることを体験した。また、常盤小学校との交流では、互いの文化や考えを紹介し合う中で協力や共感が生まれることも実感した。

児童はリー・クアンユーの言葉（冒頭部「はじめに」を参照）を通して、過去を学びつつ、未来に向かって互いの幸せのために行動することの大切さを考えた。このような体験により、児童は日常生活や学校、地域、さらには国際社会においても、違いを理解し尊重しながら関わることが、平和な社会をつくる一歩であることを実感した。授業では、単に知識を覚えるだけでなく、自分の考えを伝えたり、他者の文化や価値観を理解したりする体験を重視した。国際理解教育・平和教育としては、知識の習得にとどまらず、考え、感じ、行動する力を育むことに大きな意義がある。

4 実践上の課題

調べ学習では、児童の関心が「どうしてシンガポールの人たちは仲良くできるのか」と「シンガポールはどうやって発展したのか」の2つのテーマに分かれた。発展のテーマは魅力的であったが、企業誘致や金融などの内容は小学5年生には難しく、大人の手助けが大きく必要となった。一方、争いの歴史については児童が積極的に調べていたが、争いを起こさないための社会的仕組み、例えば住宅政策などは理解がやや難しく、十分に深めることができなかった。

これらの経験から、今後は児童が自然に学びの気づきを得られる道筋を作ることが重要である。例えば、英語がなぜ・どのような場面で使われているか、さまざまな国の祝日があることに自然に気づくような活動の順序や工夫を取り入れることで、児童が主体的に理解を深めやすくなると考えられる。

5 ふり返り

再びシンガポールで授業ができる機会がいただければ、児童生徒が身の回りの生活や文化から平和の仕組みに気づける授業展開を工夫したい。例えば、民族間をつなぐ言語としての英語や国の祝日、ホーカーセンターの店舗（中華系、インド系、マレー系などの店舗）が計画的に配置されていることなど「争いを起こさない」ための、「互いを身近に感じ、知ることのできる」国の仕掛けを児童生徒が自分で見つけられる活動を取り入れることが考えられる。

さらに、教室内でうまく話ができない友だちや、教室内・SNSでのいじめなどの問題にもつなげられるような学びを目指すことも大切である。身近な事例や体験から学ぶ授業を実践できれば、校外学習の意義もより深まり、児童はシンガポールでの暮らしや文化、そして自分たちの生活や人間関係をこれまでとは違った視点で考えられるようになると考察する。

6 おわりに

児童が触れたリー・クアンユーの言葉、「日本の行った行為を完全に許し、また忘れることはできない。しかし、（日本からの）謝罪を受け入れることで憎悪を和らげることはできる。我々は過去にとらわれることなく、未来に向かって歩まねばならない」を通して、筆者は次のように学んだ。

シンガポールは資源の乏しい小国であり、マレーシアからの独立は追放という形で余儀なくされた。それでも「国民と国家を守り抜く」というリー・クアンユーの覚悟がこの言葉には表れている。彼の行ったことは自国を守りぬく手段であったが、結果としてシンガポールは他国と共存しつつ大きく繁栄してきた。領土や資源の確保は国の発展に必要である一方、対立を招くこともある。この言葉によって、真の発展とは「自国の発展だけでなく、他国も共に生き残り、共に繁栄することにある」であると考えさせられる。

二度と悲劇を繰り返さないように、過去を振り返り伝えていく形での平和教育はこれからも大切にする必要がある。そして、このような視点に基づく平和学習も、今後重要になっていくのではなかろうか。しかし、平和教育は一見固く、難しく、つまらないものとされがちだが、児童生徒にとって楽しく、未来志向で学びをつなげられる授業や、参加型のNational Dayのイベントのような活動を通して展開していくことも必要であると考える。